

# 矢

## ●矢の特徴

矢は、時代とともに、材質が変化したり、儀式用の装飾を施したものが登場したりしましたが、その形状は古来よりほとんど変わることはありません。

矢はその目的により、狩りに使用する「野矢」、戦闘に使用する「征矢」、稽古や遊び、儀式に使用する「的矢」の三種類に大別されます。

また、矢を各部分ごとに分けると、矢尻、管、羽、箆に区分されます。

矢尻は、矢の根、板付とも呼ばれ、古くは石、骨、角、木、銅が使われていましたが、今はほとんど鉄か、または銅と垂鉛を合わせた真鍮です。また、その形は、儀式や使用目的によって様々です。

弦を矢にはめ込む部分の管は、牛などの角や竹、合成樹脂が使われます。

羽は、鷹が最適といわれていますが、鷲、白鳥、七面鳥、鶇なども使われます。

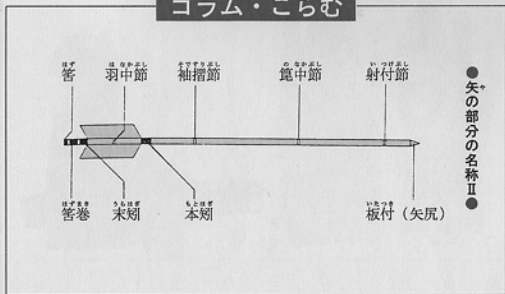
矢の胴体部分である箆は、細くまっすぐな矢竹が使用され、その主な産地は九州、茨城、秋田です。栽培もされています。箆は四つあり、箆の位置をそろえて四本を一組とします。

現在では、グラスファイバーやジュラルミン製の矢も作られるようになりました。

## ●現在の志太の矢師

現在、志太地域で生産を続けている矢師の中で、平三郎さんの直系に当たるのは小池良夫さんだけになってしまいました。小池家は良夫さんで三代目になる矢師の家系ですが、それぞれ三代目平三郎、四代目平三郎、五代目平三郎の家に入り、直々に内弟子として仕込まれたのが特徴です。

## コラム・こらむ



この道一筋六十年。今でも一ヶ月に、一組四本の矢を二十組、計八十本をめどに精力的に生産しています。日本弓道具協会静岡地区会の会長も務め、地場産業の地域振興にも一役かっています。

志太地域の矢師は現在六名です。小池さんと曾根さんにはそれぞれ後継者がおり、矢師の技術は継承されていきます。

## コラム・こらむ

